

## 久生十蘭における南方徴用：前線の日常を描く

尹, 小娟

九州大学大学院地球社会統合科学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/2200469>

---

出版情報：Comparatio. 22, pp.47-57, 2018-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

## 久生十蘭における南方徴用―前線の日常を描く―

尹 小娟

### 一 はじめに

久生十蘭は一九四三年二月から約一年間、海軍報道班員として南方に派遣された。十蘭はこのときの体験を題材に小説やエッセイをいくつか書いているが、それらについての研究はまだなされていないのが現状である。二〇〇八年十月より国書刊行会から『定本 久生十蘭全集』全一二巻の出版が始まり、小説をはじめ、戯曲・エッセイ・翻訳・ラジオドラマ・日記・遺稿・初期作品を網羅的に収録している。この全集をもとに、南方体験を下敷きにしたいわゆる南方作品（注一）を整理してみると、南方から帰還した一九四四年に十蘭の創作活動が活発だったことがわかる。ただし一九四四年に発表された短篇作品群の多くは、長篇小説「内地へよろしく」（『週刊毎日』一九四四年七月二日～一九四四年十二月二四日）に吸収されている。それゆえ、本稿ではこれらの短篇も視野に入れながら、「内地へよろしく」と「風流旅情記」（『小説と読物』一九五〇年八月）を中心に考察を行う。十蘭の南方作品に関する研究は、現時点では全集の解題程度である。しかし、戦時下だけでなく戦後になって徴用体験をもとにした作品を書いていることから、従来は「推理小説家」「探偵小説家」として扱われてきた十蘭の、「南方徴用作家」としての一面も見逃すことはできない。

南方徴用作家としての十蘭の営為に着目すると、以下の三つの疑問が浮上してくる。まずは、十蘭の南方作品の特徴はどのようなものかということ。次に、十蘭は戦時下の南方作品を通して戦争協力したのかということ。最後に、戦時下の長篇小説「内地へよろしく」と戦後の中篇小説「風流旅情記」における改作が意味するものは何かということである。こうした問題意識のもと、本稿では十蘭の南方作品をトータルに捉えつつ、十蘭の徴用体験と南方作品について考察してみたい。

### 二 日常化した非日常

「内地へよろしく」は、『週刊毎日』一九四四年七月二日号から二月二四日号にかけて、全二六回にわたって連載された。十蘭の戦時下における南方作品で唯一の長篇小説である。海軍報道班員としてジャワにやってきた画家・松久三十郎は、ある日ニューギニアにある日本領土の最南端を孤立無援で守っている兵士たちがいることを知り、そこへ行くことを志願する。目的地まで送ってくれる山吉船長、どん助、カムローとともに針盤も六分儀もない機船に乗り込み、容赦ない爆撃にさらされる小さな分遣隊に合流する。三十郎がたどり着いたのは、補給も絶え絶えで、自給自足で生き抜く兵士たちのある地だった。絶え間なく敵機の攻撃にさらされ、兵士以外の生き物といえ、兵員が体温で卵から孵したという雌鶏一羽だけである。三十郎は彼らの生き方に惹かれていき、長く滞在するつもりだったが、敵の攻撃が激しくなったため、兵士たちに内地へ戻ることを勧められる。帰還後、銃後で戦争に協力している人々と知り合

い、彼らを南方前線まで連れていく。

「内地へよろしく」で描かれているものは何か。第十四章「貝寄」にある次の言葉は、十蘭自身の思いを表していると言えるだろう。

英霊の父、前線から帰ったもの、また行くもの、焼玉機関をつくるもの、すがたはそれぞれがふけれど、みな戦争の大きな波形をうつつしながら、縁あつて一つのところに寄つてくるこの不思議さを、うつとりとなるまで思ひしづめた。(注二)

波で磯へ寄ってくる沖の貝のように、戦争のために集まっている人々のあいだの不思議な「縁」を描いているのである。こうした発想が従軍時の十蘭にすでにあつたことは、当時の従軍日記から窺える。この日記は二〇〇七年十月に講談社から単行本『久生十蘭「従軍日記」』として刊行され、はじめて読者の目に触れるところとなった。報道班員の目から見た虚飾ない戦地記録として大きな意義がある。南方滞在の行程が一九四三年九月九日まで記されており、それまで謎に包まれていた十蘭の南方徴用の実態が明らかになった。九月から翌年二月の帰国までは記述がないため、その間の行程は現段階では未詳であるが、日記に記された体験や見聞が多く作品の題材になっていることが確認できる。一九四三年五月二三日の日記で、十蘭は「南方定期」という題で小説を書くことを考え、その筋に關して次のように記している。

八時半、食堂へ行く。また帰つてきて阪道のくらやみに立つて

いるうちにフト筋がまとまる。「南方定期」という題にて、東京からスラバヤまで飛ぶ海軍定期。いろいろな運命をもつ人が偶然に一つの飛行機に乗合せたこの宿(縁)を書くなり。ちよつと乗合舟のようなものになるう。海軍定期にはそれ自体、一つの性格があり、乗っている人々は多かれ少かれ戦争と南方建設に關係をもつ人々である。みなこの戦争によって引起された影響を各自の過去の生活をもち、深いところではみな大きな一つのものに結び合されていく人々である。必ずしも絶対安全ではない、いくぶん危険というものに絶えずさらされつづけ、もし不幸があればそれは共通の不幸になるそういう運命の下にある。(注三)

結局「南方定期」という作品は書いていないが、「内地へよろしく」で描かれている、三十郎が山吉船長、どん助、カムローと出合い、羅針盤も六分儀もない機船に同乗する設定や、内地で出会った人々を連れて南方に戻る設定の背景には、上記のような発想があつたことが明らかである。それゆえ、「内地へよろしく」では、一般的な徴用作品に見られる「戦争の悲痛」ではなく、戦争のために集まっている人々の「縁」を日常生活のなかで描いているのである。これは十蘭の南方作品を戦中から戦後まで貫いている特徴である。「内地へよろしく」における料理の絵を描く場面はその好例である。

山吉船長たちと別れた三十郎はA諸島N角に着いた。ここの分遣隊では娯樂施設として烹炊所の隅を囲い、そこに酒保をこしらえている。実際にあるのはヤム薯だけが、壁には上鰻井や海苔巻など様々な(お品書き)を書いている。この(お品書き)から困苦を楽

しみに変える隊員たちの機智が窺える。そうしたなか、三十郎は炊長から料理の絵を描くように頼まれる。

「まづ、お吸物……これは鯛のそぼろ椀といふことにいたしませう。皮をひいたらあまり微塵にせずに、葛もごく薄くねがひます」

「さういふ感じですね、よくわかりました」

「ちやうど、わらさの時季ですから、削切りにして、前盛は針魚の博多作りか烏賊の霜降り……つまみは、花おろしでも……」

「こりや、自棄に難しいことになつたねえ……煮物は」

「ぜんまいの甘煮と芝蝦の南蛮煮などはいかがでせうか。小井は鰯の酢取り。若布と独活をあしらつて胡麻酢でねがひませう。

口取りは手軽に栗のおぼろさんとんと青柳の松風焼……」(注四)

戦時下とは思えない穏やかな日常の一コマである。戦時下という背景を知つて読むと、食べることでできない料理の絵を描くことの意味がより一層深く理解される。

しかし、戦場におけるこうした場面の描写は、徴用文学としては特異だといえる。一般的な徴用文学は、前線での戦闘の様子や勝利を内地に伝えることで戦意を高揚させるものや、兵士たちの苦労を強調し、国民に連帯意識を持たせようとするものがほとんどである。一方で十蘭の南方作品はそうしたものは異なり、戦争を正面から表現することを意識的に避け、非日常の生活を日常のように描いている。敵機の爆撃や艦砲射撃でいつ死んでもおかしくない状況下で

も、ユーモアのある筆致を欠かさない。「風流旅情記」では、分遣隊と別れる前の最後の夕食の場面を次のように描いている。

「戦闘がはじまると、もうお目にかかれなわけだから、これは送別の会食のつもりです。いろいろと庶務主任の心づくしも加はつてゐるわけですから、どうか」

庶務主任の苦心の刺身の正体は、一と眼見るなり素性を観破したが、さうはいはなかつた。

「これはチヌですな」

庶務主任は快心らしくニヤリと笑つた。

(略)

「チヌでないとする、これはなんといふ魚ですか」

「これは、あなたが気にしてゐられた渚の一本椰子の最後の実です。椰子の実の内側に乳白色の果実がついてゐるでせう。あれを刺身のやうに見せかけて、あなたの味覚を試験してみようといふ士官室の企らみだつたんです。」

といふと、声を合せてドツと笑つた。(注五)

このあとトランガン島最後の決戦となり、多くの死傷者が出ることは明らかである。にもかかわらず、そうした現実には溺れることなく、ユーモアの外衣を纏つて戦争の残酷さを相対化し、戦闘場面や戦死を直接描かない。十蘭はなぜ戦争をこのように描くのか。「海図」『新太陽』一九四四年七月)の冒頭で十蘭は次のように書いている。

一つ雄大な話をいたします。戦争の悲壮や悲痛な面が少し多く伝へられすぎ、さうなりますと戦争といふものは苦い味のものとはばかし思はれ勝ちですが実はさういふことはかりではないのでして、苦しいには苦しいとしても自らその中にゆとりありうるほひあり洒々落々たる風光も多々無数にありまして、殊に爆撃がすんで敵機が去つて行つたあとのおだやかさ、まづ一役すんだといふ、のびのびとした気持は後方などではたうてい味ふことの出来ぬ和やかなもの（注六）

つまり、「戦争の悲壮や悲痛」ばかりが内地へ伝られるため、兵士たちの前線生活の穏やかな一面を描くのである。

しかし、いくら戦場の苦痛を内地へ伝えることを控えようとしても、徴用文学として兵士たちの故国への愛や家族への思い、戦死などは避けられない主題である。これは十蘭にとつても例外ではなかつた。彼の南方作品には雪・月・花のエピソードが登場するものが数篇あり、兵士たちの前線における生活のもう一つの側面を描いている。例えば、分遣隊の兵士たちは塩鮫を「初雪」と名付けている。その理由について「内地へよろしく」の庶務主任は次のように語っている。

出発する朝、初雪が降りましてね、兵隊なんかは、これから行くところは雪月花のセツの無いところだから、眼玉に風邪をひかせるほどしつかり押んでおけなどといつてゐました。塩鮫が『初雪』になつたのは、まあ、こんな因縁もあるんです。（注七）

戦争は一見すると「雪月花」と無縁に見えるが、十蘭の南方作品には戦時下で「雪月花」を求める人々が描かれている。政府が啓蒙宣伝のために発行した写真グラフ誌『写真週報』には、三一五号（一九四四年四月五日）から「覆面文芸」欄が設けられた。数名の作家が組になり、各作家が二、三篇ずつ執筆している。十蘭は三六三号（一九四五年三月一四日）に「雪」、三七二号（一九四五年六月一日）に「花」、三七四号（一九四五年七月一日）に「月」を発表した。なお、遺品中の原稿では「雪」「月」「花」の順になつており、雑誌掲載順とは異なつている（注八）。

「雪」では、雪の好きな兵隊が雪のない南方へ派遣されることが決まり、その出発の場面が描かれる。右に引用した「内地へよろしく」の場面と同じく、「兵達は甲板に立つてそれを眺め、「行く先は雪月花のセツの無えとこだはで、眼ン玉が風イひくほど押んでおけや」（注九）と言う。南方に到着後しばらくして、本隊から次のような慰問文が届く。

初雪

石田カツ子

岩国ノ キンタイバシニ ケフ初雪ガフリマシタ。南ノ兵タイ  
サンニ見セタイナ（注一〇）

雪のない南方の戦場で故国を懐かしく思う兵士達はこれを読んで泣き出した。

「月」では、ある隊の兵士たちはみな器用で、戦争の暇々に鉄木

でパイプを作ったり、蟬を刻んだり様々な細工物を楽しんでいるが、谷という兵士だけは何もしないで毎日ぼんやりしている。ある日、谷は隊長が琴を弾いているところを見て、一ヶ月後鉄木で作った見事な琴を持つてくる。谷は京都の有名な御琴師だったのである。そしてある夜、兵士たちは露草の上に胡座をかいいて隊長の琴を聞く。

ちやうど仲秋で、亭々たる巨木の上を玲瓏と月が渡った。曲は「望の月」だつたさうである。私はこの話をカイマナで聞いた。蕪鬱たる千古の密林を漏れる琴の音はまあどのやうなものであつたらう。(注一一)

兵士たちが胡座をかいいて琴の音を聞いている情景は、ともすれば戦地には似つかわしくないものであるが、南方前線での人情味溢れた生活の一コマである。遠い南方の戦場で月見をしながら「望の月」を聞くと、兵士たちは内地の家族を思っているだろう。

「花」では、アラフラ海の南にある濠北に近い無名島で、動くものは空の雲、聞こえるものは波の音だけという単調な日々を送っているS警備隊の話が描かれている。沈鬱な気分の方で、彼らは何か不足したものを感じている。食べ物や飲み物ではない、「なにかもつとほかの、ちよつとした簡単なもの」(注一二)なのだが、それが何か誰も分からない。ある日、仲間の一人が戦死する。遺骨をパンの箱に収め、石灰窟の奥に安置したあと、ある兵士がふと、「なにか花がないのか」と言う。それを聞いて、兵士たちはようやく気づく。

花——みなそこで愕然とした。一年半の間、一つの花も見ずに暮らして来たことを思ひだし、無意識のうちに自分らがげげしく求めてゐたものがなんであつたかをはじめて諒解した。(注一三)

「なんとかして花を探してくる」と一人の兵士が言い、夜に船でこつそりと敵地へ向かう。三日目の朝、その兵士は憔悴しながらも蘭の花を一輪手に持つて帰ってくる。S警備隊の補給は絶え絶えの状態で、何が「不足」しているかといえ、それは何よりも食糧であるはずだが、兵士たちが求めていたものは「花」であつた。花は美の象徴である。兵士たちは戦場にいながらも美を求めることを忘れてはいなかつた。前述した「雪」「月」は「花」と同じように日常生活のなかの美である。戦争という非日常の状況とは縁遠い存在だが、戦争であるからこそ「雪月花」が必要なのであり、残酷な戦争を生き抜くためには、食糧以上に心の糧が欠かせないのである。

十蘭は南方作品で「戦争の悲痛な面」を伝えることを控えながら、自らの作風を求め続けた。食糧が不足し、命が危険にさらされている戦時下という非日常のなかでも、美や楽しみを求める兵士たちの生への積極的な姿を十蘭は描こうとしたのである。

### 三 戦時下の協力

十蘭がどのような経緯で南方に徴用されたのかについては未詳な点が多いが、手元にある資料を見る限り、彼が南方に徴用されることになったのは決して不思議なことではない。

まず、年譜によると、十蘭は一九四〇年七月に設立された国防文

芸連盟の常任委員兼評議員を務め、同年十月、師事していた岸田国士の大政翼賛会文化部長就任に伴い、同部嘱託となった(注一四)。加えて、十蘭にはもう一つの見逃せない経歴がある。それは、一九四一年十月に『新青年』の依頼で中国戦線に従軍していることである。年譜によると、その詳細は次の通りである。

『新青年』編集部への要請で撰津茂和と中国戦線へ従軍した。上海、漢口を經由して湖北省随県の守備隊に九日間滞在、のち漢口で工場や農園などを視察し、帰路には漢口から南京まで揚子江の船旅も経験している。帰国してから『新青年』誌上で撰津と対談する。(注一五)

ここで、『新青年』という雑誌に注目したい。一九二〇年に創刊された『新青年』は国内外の探偵小説を紹介するものである。江戸川乱歩や横溝正史をはじめとする多くの探偵小説作家の活躍の場となり、「都会的雑誌」として都市部のインテリ青年層のあいだで人気を博した。一九三七年に始まった日中戦争が拡大すると、その影響を受けて戦争協力するようになった。山下武が『新青年』をめぐる作家たち(筑摩書房、一九九六年五月)で述べているように、支那事変以降、「新青年」は急坂をすべり落ちるように戦時色を強めてい(二二頁)った。このとき、『新青年』編集部への要請で中国へ従軍したことから、十蘭が『新青年』と深く関わっており、積極的に戦争協力する姿勢が窺える。

また一九四三年三月、十蘭は大政翼賛会宣伝部のために、本名の阿部正雄名義で戯曲『村の飛行兵』(副題:「素人に出来る移動演劇」)を刊行する。ある村出身の飛行兵が戦地へ行き、ある日飛行機でその村の上を通ることになった。村の人たちはみな家を出て、国旗を振って喜んでいる。十蘭はこの脚本のなかで、「海軍飛行兵が戦地へ行くのに不思議はないわ」(九頁)、「旦那さまが飛行機で空を……下では奥さまがハンケチを振る……悪くないわね」(二二頁)といった台詞を書いている。ここから、銃後の人々の戦意を高揚する目的が明らかに窺える。

さらに、脚本の最後で十蘭は、「この村出身の飛行兵の空からの訪問を、全村総出で感激しながら見送る淳朴な農村のすがたを素直に描きだすことができれば、それで十分に上演の目的は達しられるので、その一幕は、芝居をするといふ気持を離れ、日常の生活通り、ごく自然にやるほうがかへって成功しやすい」(「村の飛行兵」の演出について)(三三頁)と、演劇の注意点まで書いている。前節で論じてきたように、「日常の生活の通り」あるいは「自然にやる」というのは、十蘭が戦争を描く際の表現方法でもある。

総じて言えば、十蘭は戦時体制にきわめて協力的な姿勢をとっていた。しかし、作家の戦争協力の問題について論じる場合、どの文学団体に入っていたかや、海外戦線に従軍したのか否かではなく、作品が同時代読者に対してどのようなメッセージ性を持っていたのかに注目すべきではないだろうか。本節では戦時下の南方作品を対象に、外地に派遣された徴用作家としての十蘭は戦争をどのように表現し、それが同時代読者にとってどのような意味を持ったのか探

ってみたい。

前述した十蘭の従軍日記の前半部、すなわち前線に出る前のジャワ滞在中の生活を記した部分は、十蘭自身が認めているように「沈滞」の期間である。五月一日の日記に、「徴用以来の心労と途中の氣づかい、スラバヤの暑氣とまとまりなき生活など累々重なりて心神〈延〉弱せりと見ゆ」(注一六)とあるように、いわゆる〈南方ボケ〉のような状態だった。五月二一日の日記で、十蘭は次のように反省している。

こういう戦争から遊離した状態にすることがとてもうしろめたく、(中略)最近アツツ島やソロモンの前線の苦勞を耳にするにつけ、作家の才能などはどこかへ埋めつくし自分を戦争の純粹な一個の卒伍とし報道班員としての命をかけた日々の実践そのもののほうがよっぽどすぐれた作品だという風にも考えられる。(中略)果して生きてかえられるかそれも期し難いから、せめて最後の筆のしずくとして今迄見たものを纏めたく思ひ……(注一七)

徴用前期の「意志薄弱」で「無為の日々」を送る自分に耐え難くなっているなか、小説よりも報道班員としての日々の実践の方がすぐれた作品だと慰めながらも、やはり作家として南方で見たことを作品化するべきではないかという矛盾を抱えている。この日記が二〇〇七年に初めて公開されたことはすでに述べたが、周知のように、徴用作家が従軍中に日記をつけることは原則として禁じられていた。戦時下の軍部による検閲を通して露見されたものも、終戦時に進駐

軍の緊急命令で焼却を求められた。それゆえ、十蘭の「従軍日記」は彼の徴用中の本音を記しているといえるだろう。そして同時に、徴用前期から十蘭が戦争協力していたことが分かる。

十蘭のこうした姿勢は、三月十日の日記に記しているジャワのセレクト・ホテルの持ち主デ・ロングの話からも窺える。デ・ロングは阿部知二の小説「死の花」に登場するファン・プリングのモデルでもある(注一八)。十蘭が日記に記しているデ・ロングの話、すなわち植物を栽培する話、建てたホテルにオランダ人たちが避難してきた話、他人の密告で死刑に処せられた話のほとんどが「死の花」と一致している(ただし「死の花」では、「密告」はある日本人軍属の謀略によるものだという)。

しかし、死刑に処せられたデ・ロングに対する十蘭の反応は、阿部のそれとは異なっている。「阿部知二における南方体験」で論じたように、友人を救うことができない「死の花」の主人公比延は、軍当局に対して無力で、友人に罪悪感を持つている。それに対して十蘭は、「あわれの如くにして必ずしもあわれというようなことにはあらず。これ、即ち戦争なり。敵国人一個にたいする憐憫感傷など何の意味あらんや。戦前の和蘭の暴戾を見よ」(注一九)と、淡々と述べている。戦時下で敵性国人学者を保護するために奔走する阿部と比べれば、十蘭の徹底した戦争協力の姿勢は際立っているといえる。

一九四四年二月末の帰還から約一年間、十蘭は定期的に従軍関連作を発表している。大半の作品で作家名に「報道班員」の肩書きが付されている点からすると、これは報道班員としての宣伝業務の一つだったと考えられる。それゆえ、一九四四年七月から連載を始め

た「内地へよろしく」に戦争協力的な言説が多いのは言うまでもない。例えば、これまで浅薄な生活を送っていた新太郎のもとに召集令状の赤紙が来る場面では、十蘭は新太郎に次のように語らせる。

それを手に持った途端、この三十何年、積み積った浮世の煩はしさがいつべん肩から抜け落ちたやうな、なんともいへない安かな気持ちになつて（中略）これからは食ふことも着ることもみな国家に任せて、じぶんはただひとつのことに精根を傾ければそれでいいのだと思ふと、嬉しくて有難くて涙が出ました。（注二〇）

ここには、召集令状が来たことの嬉しさと、これまでの「根のない」生活ときっぱり別れることができる期待とが表れている。こうした描写は、男にとって「戦争に行くということが本当の人生の門出になる」（一六八頁）という戦争に参加するメリツトを語っているだけでなく、国民に内地と前線との連帯感を持たせ、戦意を高めるためでもあると思われる。

しかし、それ以上に注目したいのは、そうした戦争協力的な言説のほとんどが、上記の引用のように主人公ではない登場人物に語らせる形で書かれ、主人公あるいは作者の気持ちとその背後に隠されていることである。つまり、十蘭は直接的な戦争賛美とは意図的に距離を置き、客観的に戦争を語っているのである。前述した「貝寄」の引用もそうであるが、息子が戦死した父親、戦鬪で生き残って前線から帰ってきた人、そして国のために前線へ行く決心をした人々が集まっている場面を戦争協力的に表現するとすれば、読者あるい

は国民の戦意を高揚させるもつと直接的な描き方があつたはずである。しかし、十蘭はこの場面を、「縁あつて一つのところに寄つてくるとこの不思議さ」と淡々に描いており、登場人物の三十郎はまるで戦争とは無関係であるかのように、ただの観察者としてそこに居る。

それでは、なぜ十蘭は直接的な戦争協力の表現と距離を保っているのだろうか。十蘭は「用務飛行」『日の出』一九四四年十月〜一九四五年三月）で自身の戦争に対する理解の変化を述べている。三日間行方不明になっていた探偵機が見つかり、早く助けに行くために炊炊員が四十分間で稲荷寿司を用意することを命じられる。工場長の「おれ」は、そうした無理な命令を遺憾なく実施し、完了する炊炊員の「誠実」さに感動する。

戦ひの真のすがた、真の苦勞といふものは、かういふ人知れぬ片隅にひそんでゐるので、かういふ面に触れることがなくては真に戦争を知つてゐるとは言ひえないのであらう。けふ、この瞬間までおれが抱いてゐた戦争にたいする觀念などは、なんとも底の浅い通俗極まるものであつたと、思はず顔の赧らむのを覚えつゝ、それと同時に、おれもこれでよほど戦争といふものが判るやうになつた思ひで、なんともいへず嬉しくなつた。

ところが、微笑でもすべきはずのおれが、気がついてみると泣いてゐた。手で頬を撫でて見ると、まぎれもなく涙で濡れてゐるので、これにはおれも驚いたのである。

おれは数理の判別がはつきりし、とりわけ、戦争などといふものを普通の人間よりも厳しく律したがるはうであるから、戦争で

兵隊が死ぬことなどは、秋になれば葉が落ちるぐらゐに当然過ることだし、戦死の状況がどれほど悲惨であらうとも、感情などは動きもしないけれども、烹炊員の姿を想像してゐるうちに、いぢらしいといふか、偉いといふか、永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実の光にうたれておもはず溢れだしてきた涙なのであつた。(注二一)

「戦争といふものが判るやうになつた」というのは、戦争の眞の姿は戦闘の残酷さや兵士の戦死といつた新聞やラジオで報道されるような大きな出来事ではなく、名もない烹炊員が稲荷寿司を作るような人知れぬところに潜んでいるということである。十蘭が描こうとしたのは、こうした「永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実」である。「内地へよろしく」には、まさにこうした十蘭の創作意識が反映されている。

右の引用で描かれている戦場の死に関して、「用務飛行」では「戦争で兵隊が死ぬことなどは、秋になれば葉が落ちるぐらゐに当然過ることだし、戦死の状況がどれほど悲惨であらうとも、感情などは動きもしない」と表現されているが、「内地へよろしく」でも似たような表現が見られる。三十郎が内地に戻つたあと、友達のルダンさんが家に来て、平気な顔で二人の息子が前線で戦死したと語る。三十郎は驚いて、「どうして今までそれを隠してとほけてみたんです、あなたらしくもない」と言うと、ルダンさんは次のように返した。

この戦争で日本人が戦死するのは、秋になれば葉が落ちるほど

の自然なはなしで、今更、いつたつて言はなくなつて同じことでせう……おや、葉が落ちる、などと言はれたつて、こつちは、はあ、さうですな、といふほか返事のしやうもない……さつき、私が心祝ひといつたのは、銜つてるのでも、照れてるのでもない、死んだお妻さんが、さぞあの世で肩身を広くしてゐるだらう……あたしにはそれがよくわかるので、それで、お妻さんと差し向ひで、葡萄酒の一杯も飲まうかと思つて……(注二二)

十蘭は前線で戦死した青年を描くことで、戦争の「悲壯」を表現しようとしているのではない。息子たちの戦死を「秋になれば葉が落ちるほどの自然なはなし」だと淡々に語るルダンさんに代表される内地の人々には「永久に酬いられ知られることのない人知れぬ誠実の光」があり、それこそが「戦ひの眞のすがた」だと十蘭は考えている。それゆゑ、十蘭の戦時下における南方作品(「第〇特務隊」「用務飛行」「少年」「内地へよろしく」など)のほとんどが戦争を直接的に賛美し、戦意高揚させることを避け、一人の具体的な人物に着目する形で戦争を表現している。

ただし、これをもつて十蘭は戦争協力していないと捉えるべきではない。前述したように、中国戦線に従軍するなど、南方徴用前から戦争協力的な姿勢があつたことはまぎれもない。とはいへ、同じく海軍報道班員として南方に派遣された海野十三の『ペンで征く』(日本放送出版協会、一九四二年一月)海野に関しては拙論「海野十三における南方体験」(注二三)で論じた)で随所に見られる戦

争賛美とは異なり、十蘭の作風と戦争に対する理解から、戦争協力のためだけではなく、文学性をも重んじる創作姿勢が窺える。

#### 四 おわりに

本稿では、久生十蘭が戦時下及び戦後に発表した南方作品と従軍日記を手がかりとして、従来看過されてきた十蘭の「南方徴用作家」としての一側面を考察した。十蘭は徴用前から積極的に戦争と関わっていたことから、戦時下の作品に戦争協力の傾向があるのはいうまでもない。しかし十蘭の南方作品は、戦争という非常事態を日常生活のようにユーモア溢れる筆致で描いている。このように、十蘭の戦時下の作品には戦争協力の姿勢が見られる一方で、文学性を重視する意志も窺え、これこそが十蘭の南方作品が極めて特徴的な所以である。

#### [注]

- 一、・「爆風」『新青年』一九四四年四月
- ・「海軍歩兵」『文芸春秋』一九四四年五月
- ・「第〇特務隊」『新青年』一九四四年六月
- ・「酒保」『週刊毎日』一九四四年六月
- ・「海図」『新太陽』一九四四年七月
- ・「内地へよろしく」『週刊毎日』一九四四年七月二日、一九四四年一月二日(四日)

- ・「効用」『大洋』一九四四年八月
- ・「白妙」『日の出』一九四四年八月
- ・「要務飛行」『日の出』一九四四年十月、一九四五年三月
- ・「少年」『新青年』一九四四年一月
- ・「弔辞」『大洋』一九四五年一月
- ・「ノア」『富士』一九五〇年二月、四月
- ・「勝負」『オール読物』一九五〇年四月
- ・「風流旅情記」『小説と読物』一九五〇年八月
- ・「天国の登り口」『小説と読物』一九五三年一月
- 二、『定本久生十蘭全集 第五卷』(国書刊行会、二〇〇九年一月) 一五五頁。
- 三、『久生十蘭「従軍日記」』(講談社、二〇一二年八月) 二〇五頁。
- 四、前掲注二に同じ。七八頁。
- 五、『定本久生十蘭全集 第七卷』(国書刊行会、二〇一〇年七月) 六五九頁。
- 六、前掲注二に同じ。四五頁。
- 七、前掲注二に同じ。八〇頁。
- 八、川崎賢子・沢田安史「解題」(注二に同じ) 六二五頁。
- 九、前掲注二に同じ。三八四頁。
- 一〇、前掲注二に同じ。三八四頁。
- 一一、前掲注二に同じ。四九二頁。
- 一二、前掲注二に同じ。四九二頁。
- 一三、前掲注二に同じ。四九二頁。
- 一四、江口雄輔編「久生十蘭年譜」『定本久生十蘭全集 別巻』(国書

刊行会、二〇一三年二月、六四九頁。

一五、注一二に同じ。六五〇頁。

一六、前掲注三に同じ。一七〇頁。

一七、前掲注三に同じ。二〇〇頁。

一八、拙論「阿部知二における南方体験」(『Comparatio』20号)で論じた。

一九、前掲注三に同じ。五九頁。

二〇、前掲注二に同じ。一六八頁。

二一、前掲注二に同じ。三一頁。

二二、前掲注二に同じ。一五四頁。

二三、『九大日文』三二号で論じた。